

# 井尻B遺跡18

— 井尻B遺跡第28次調査報告 —

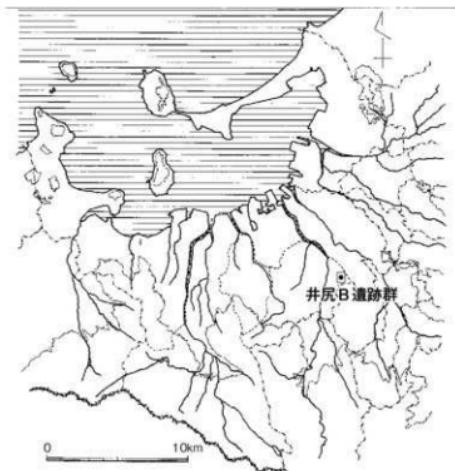
2008

福岡市教育委員会

# 井尻B遺跡18

— 井尻B遺跡第28次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第974集



遺跡略号 IGB-28  
遺跡調査番号 0658

2008

福岡市教育委員会





1. SC-1・SC-2  
(東から)



2. SC- 6  
(南東から)



3. SC- 7  
(西から)





1



2



3



4



5

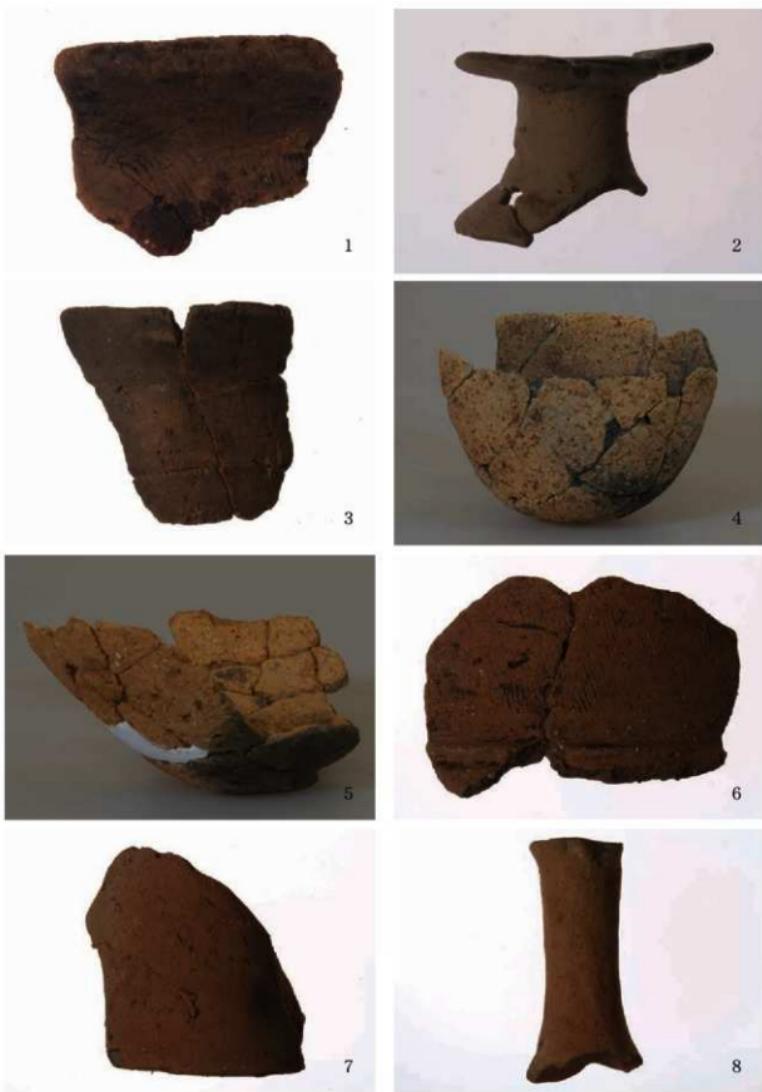


6

1. 家形埴輪片表面 (17) 2. 家形埴輪片裏面 (17) 3. 家形埴輪片網代部分 (17)

4. 家形埴輪片表面 (18) 5. 家形埴輪片断面上部 (17) 6. 家形埴輪片断面底部分 (17)





1. 弥生土器甕口縁部 (1) 2. 弥生土器高坏脚部 (2) 3. 弥生土器甕口縁部 (3)  
4. 弥生土器鉢 (4) 5. 弥生土器壺底部 (8) 6. 弥生土器壺頸部 (10) 7. 弥生土器器台? (11)  
8. 弥生土器高坏脚部 (13)



## 序

福岡市には多くの文化財が分布しております。本市では文化財の保護、活用に努めております。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は共同住宅建設に先立って調査された井尻B遺跡群第28次調査の報告です。発掘調査の結果、弥生時代を中心とした遺構・遺物が見つかりました。井尻B遺跡群は旧石器時代から人々が生活し、また、弥生時代から古墳時代前期には福岡平野の中核の一角を占める遺跡でした。また、奈良時代の寺院の存在も推定され、古代においても一つの拠点でした。

本調査は井尻B遺跡群の南側にあたる部分の調査で、弥生時代後期から終末期の竪穴式住居などが発見されました。また隣接する古墳である井尻B1号墳の家形埴輪も発見されました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、積和不動産九州株式会社はじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が、2006年12月11日～2007年1月31日にかけて行った井尻B遺跡群第28次調査の発掘調査報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付して検出順にS-1, S-2, のように通し番号をつけた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付しSK-1のように記述する。
3. 本書で使用する方位は真北である。
4. 本書で使用した遺構・遺物実測図は福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課 赤坂亨・本田浩二郎が作成し、製図は赤坂・上方高弘・石久美子・安武憲史が行った。
5. 本書で使用した写真は、赤坂・上方高弘が撮影した。
6. 本書の執筆・編集は赤坂が行った。
7. 弥生土器の時期比定には以下の文献を参照した。  
柳田康雄 1987 「高三瀬式と西新町式」『弥生文化の研究4 弥生土器Ⅱ』 雄山閣
8. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
9. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0658		遺跡略号	IGB-28	
地　　番	福岡市南区井尻4丁目170番12他		分布地図番号	井尻25	
開　発　面　積	527.68m <sup>2</sup>	調査対象面積	204.18m <sup>2</sup>	調査面積	240.6m <sup>2</sup>

## 本文目次

I.はじめに	
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 調査の記録	
1. 概要	4
2. 層序	4
3. 遺構と遺物	6
豎穴式住居SC-1	6
豎穴式住居SC-2	6
豎穴式住居SC-3	6
溝状遺構SD-4	6
土坑SK-5	6
豎穴式住居SC-6	8
豎穴式住居SC-7	10
溝状遺構SD-8	10
溝状遺構SD-9	11
ピットP-21	12
ピット出土遺物	12
遺構外出土 家形埴輪片	12
出土状況	12
遺物詳細	12
種別と部位の推定	14
IV. 小結	14

## 挿図目次

第1図	井戸B遺跡の位置と地形 (1 / 4,000)	2
第2図	井戸B遺跡第28次調査位置図 (1 / 1,000)	3
第3図	井戸B遺跡第28次調査全体図 (1 / 100)	5
第4図	SC-1・SC-2・SK-5 (1 / 40)	7
第5図	SC-1・SC-2・SC-3・SK-5・SC-7出土遺物 (1 / 3)	8
第6図	SC-3・SD-4・SD-8・SD-9 (1 / 40)	9
第7図	SC-6 (1 / 40)	10
第8図	SC-6・ピット出土遺物 (1 / 3)	11
第9図	SC-7 (1 / 40)	12
第10図	遺構外出土 家形埴輪片 (1 / 3)	13

## 卷頭図版目次

- 卷頭図版1 1. SC-1・SC-2 (東から)  
2. SC-6 (南東から)  
3. SC-7 (西から)
- 卷頭図版2 1. 家形埴輪片表面 (17)  
2. 家形埴輪片裏面 (17)  
3. 家形埴輪片網代部分 (17)  
4. 家形埴輪片表面 (18)  
5. 家形埴輪片断面上部 (17)  
6. 家形埴輪片断面底部分 (17)
- 卷頭図版3 1. 弥生土器甕口縁部 (1)  
2. 弥生土器高环脚部 (2)  
3. 弥生土器甕口縁部 (3)  
4. 弥生土器鉢 (4)  
5. 弥生土器壺底部 (8)  
6. 弥生土器壺頸部 (10)  
7. 弥生土器器台? (11)  
8. 弥生土器高环脚部 (13)

## 図版目次

- PL1 1. 調査区東半全景 (西から)  
2. 調査区西半全景 (西から)
- PL2 1. SC-1 中央部分 (西から) 2. SC-1 焼土部分 (南から)  
3. SC-1 中央土坑 (東から) 4. SC-1 完掘時 (東から)  
5. SK-5 と焼土 (西から) 6. SK-5 完掘時 (西から)  
7. SC-3 (西から) 8. SC-3 R-1出土状況 (南から)
- PL3 1. SD-4・SD-9 (西から) 2. SC-6 (北東から)  
3. SC-6 張り床完掘時 (北東から) 4. SC-6 張り床完掘時 (南東から)  
5. SC-6 P-2 (北東から) 6. SC-7 焼土 (南東から)  
7. SD-8 (東から) 8. P-21 (東から)

## I. はじめに

### 1. 調査にいたる経過

平成18年9月15日付けで積和不動産九州株式会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課宛に福岡市南区井尻4丁目170番12他の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号18-2-555）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻B遺跡群（分布地図番号25井尻 0090・遺跡略号ICB）に含まれている地点であり、この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成18年10月31日に申請地内の試掘調査を行い、現地表面下20～30cmで柱穴・土坑と思われる遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財第一課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成18年度に発掘調査、平成19年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお調査対象としたのは開発面積527.68m<sup>2</sup>のうち、共同建築物部分の204.18m<sup>2</sup>である。

調査期間は平成18年12月11日から平成19年1月31日までである（調査番号0658）。調査面積は240.6m<sup>2</sup>、遺物はコンテナ5箱分出土している。また、整理作業と報告書の刊行は平成19年度に行った。

現地での発掘調査にあたっては積和不動産九州株式会社をはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただきと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

### 2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

事業主体 積和不動産九州株式会社

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課

平成18年度

調査総括 山口讓治（埋蔵文化財第一課長）

山崎龍雄（埋蔵文化財第一課調査係長）

調査庶務 文化財管理課 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財第一課調査係 赤坂亨

埋蔵文化財第二課調査係 阿部泰之

調査作業 石川洋子 北條こず江 水田ミヨ子 林厚子 宗像正勝 村山巳代子 濱地静子

相川春彦 平田周二 浦伸秀 岩崎良隆

平成19年度

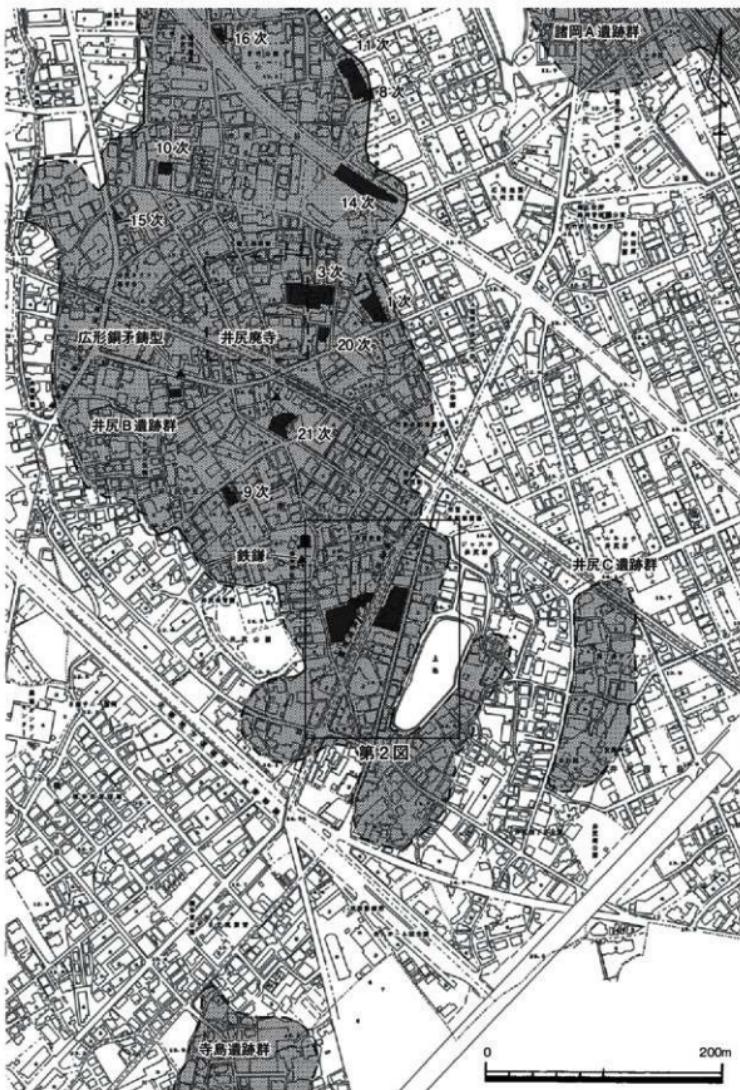
総括 山口讓治（埋蔵文化財第一課長）

米倉秀紀（埋蔵文化財第一課調査係長）

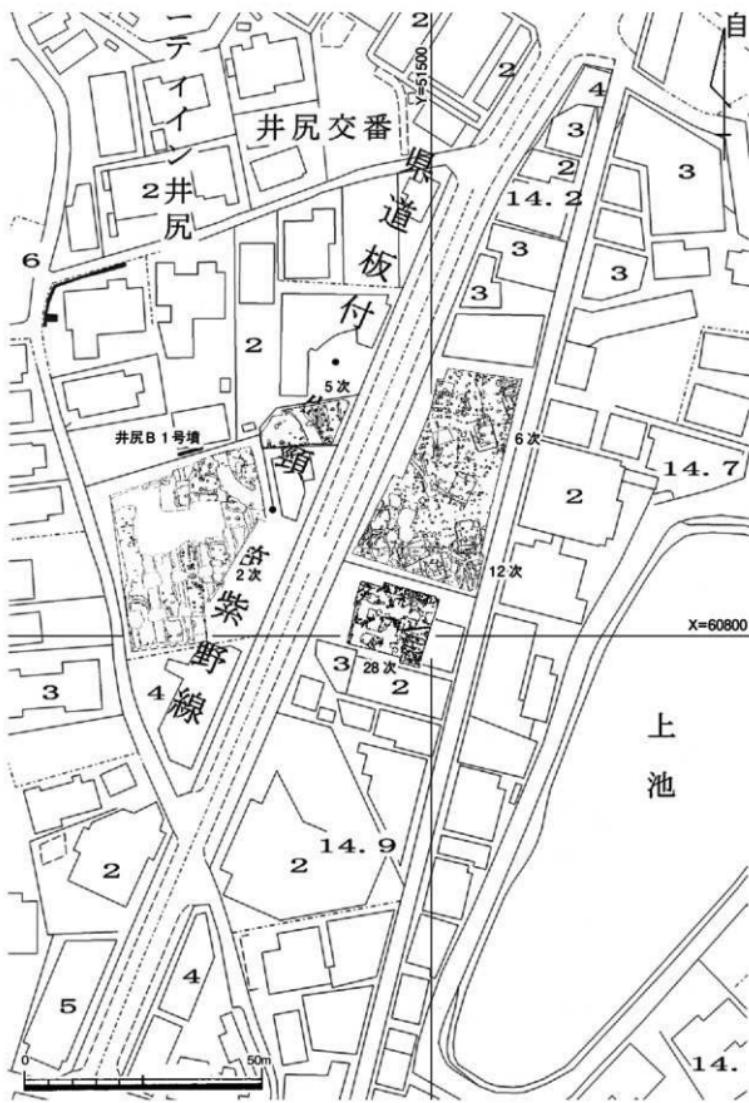
庶務 文化財管理課 鈴木由喜

整理担当 福岡市博物館学芸課 赤坂亨

整理作業 石水久美子 小田敬子



第1図 井尻B遺跡の位置と地形 (1 / 4,000)



第2図 井尻B遺跡第28次調査位置図 (1 / 1,000)

## II. 遺跡の立地と環境

井尻B遺跡群は福岡平野を流れる那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に位置する。この台地は阿蘇山の火砕流の堆積物からなり、堆積物上部の暗赤褐色土を鳥栖ローム層、下部の乳白色粘土層を八女粘土と呼んでいる。井尻B遺跡群をはじめ、五十川、麦野、板付、諸岡、那珂、比恵遺跡もこの鳥栖ローム層上の遺跡である。

井尻B遺跡群では現在までに30次にわたる発掘調査が行われ、旧石器時代、弥生時代、古墳時代、古代の遺物・遺構が発見されている。本調査地点の周辺では、北側隣接地で第6・12次調査地点が、西側の道路を隔てた西方40mの地点で第2次調査、北西方40mの地点で第5次調査が行われている。

旧石器時代の石器が第2・6・12次調査から、弥生時代の青銅器の鋳型が第6次調査から、弥生時代の墓が第2次調査から、弥生時代後半～古墳時代前期の竪穴式住居が第2・6・12次調査から、奈良時代の掘立柱建物が第6次調査から、竪穴式住居が第2次調査から、それぞれ発見されている。また、第2・5次調査区にまたがって古墳の周溝が検出され、円筒埴輪・朝顔形埴輪・動物埴輪・家形埴輪が出土している。5世紀代の円墳と考えられ、井尻B1号墳と名付けられている。

## III. 調査の記録

### 1. 概要

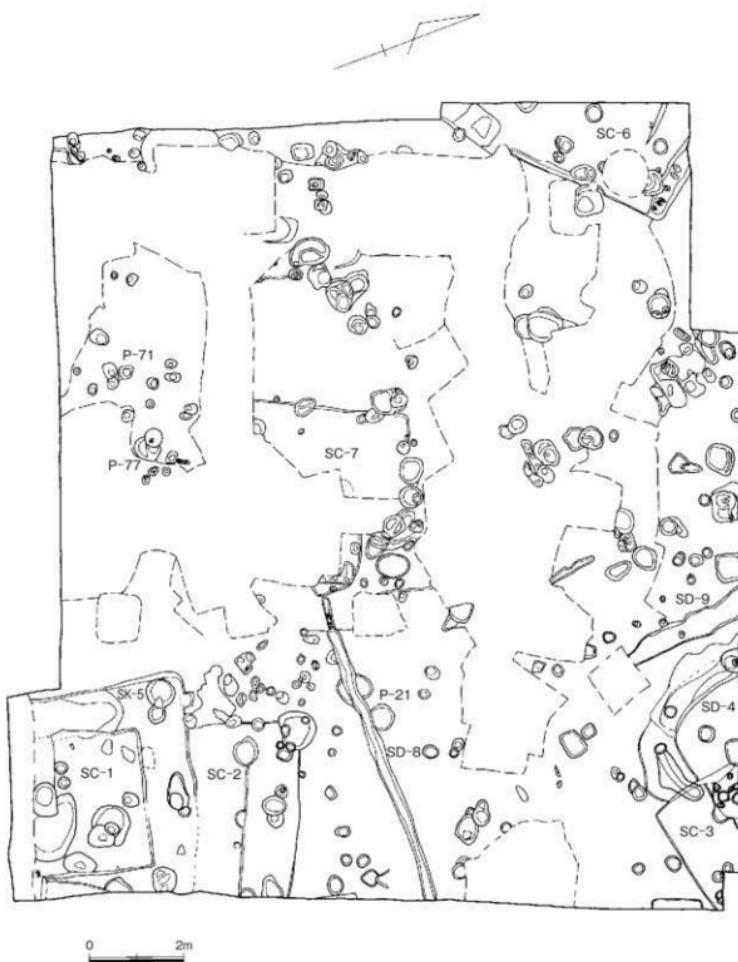
平成18年12月11日～12日までバックホウによる表土掘削を行う。調査開始時は阿部が調査を担当した。12月13日から作業員を入れ搅乱掘削、遺構検出作業、および遺構の掘り下げを開始した。12月19日、阿部から赤坂へ現場担当を引き継ぎ。平成19年1月18日、遺構掘削が終了した。1月19日、高所作業車による調査区全景写真撮影を行う。同日より20分の1図の作成開始。1月29日、作図および個別遺構の写真撮影完了。1月30日に機材一部撤収、1月30日～31日までバックホウによる埋め戻し。1月31日、機材を完全に撤収し調査を終了した。

弥生後期～終末期の竪穴式住居5棟、溝3、土坑2を検出した。SC-1は平面コの字を呈するベッド状遺構をもつ。SC-7は削平がひどく全容は不明。他の住居跡も遺構の掘り込みが浅く、搅乱に切られていて残存状態が不良である。2次調査で確認された旧石器時代遺物はローム層から検出されず、8次・12次調査のように遺構の覆土からの出土もなかった。本調査地点は全体にかなりの削平を受けているようである。家型埴輪はSC-7付近の表土剥ぎ中に出土した。遺物はコンテナ5箱分出土した。

座標は国土座標を用いた。座標は光波測定器を用い、基準点T81を器械点・T74を方向点とする開放トラバースにより調査区内へ座標移動を行った。なお基準点T81・T74の国土座標は平成4年3月に西技測量設計株式会社の行った博多地区遺跡基準点測量委託の測量成果に基づいている。

### 2. 層序

層序はSC-6調査時に調査区西壁北側付近で確認した（第7図）。表土は黒褐色を呈し、現地表面の標高は14.700m前後である。現地表下約20～30cm、標高約14.500m前後で暗赤褐色の鳥栖ローム層の遺構面となる。表土からは家形埴輪片が出土するなど一部遺物を含む包含層となっている。表



第3図 井尻B遺跡第28次調査全体図 (1 / 100)

土と造構覆土の境界線は水平ではなく、かなり乱れており、造構を含むローム層が後世にかなりの削平を受けたあとに人為的に埋め立てられたものと想定される。

### 3. 遺構と遺物

本調査地点の遺構面はローム層の1面である。周辺調査区でローム層中より旧石器時代の石器が見つかっており、ローム層一部で精査を行ったが本調査地内では発見できなかった。

本報告では遺構数が少ないため、遺構種別順ではなく遺構番号順に記述を行う。

#### 竪穴式住居 SC-1 (第4図・巻頭図版1-1・PL2-1～4)

調査区南側で検出した。方形の竪穴式住居である。ほぼ東西方向に軸をとり、南北3.3m以上×東西4.8m以上を測る。東側と南側は調査範囲外に伸びている。南側については調査区を幅1mほど拡張して確認したが、搅乱を受けていて全体の形状は不明であった。全体に削平を受けていて遺構の残り具合は不良である。北側で方形の竪穴式住居SC-2と重なって検出された。両遺構を縦断するように土手を残し、土層観察を行ったが、両遺構の明確な前後関係は分からなかった。ただ、SC-1の覆土中からSC-2に関するような遺構や焼土が検出されなかったことからSC-1が新しく、SC-2が古いと判断した。東西北辺に幅約1mのベッド状遺構が付く。ベッド状遺構の北辺と東辺は地山ローム層の削り出しであるが、西辺は地山のローム土に黒褐色土の混ざった土を用いた3.6m×2.5m張り床によって形成している(第4図第9層)。主柱穴は確認できなかった。焼土はベッド状遺構北辺で3ヶ所、中央部分で2ヶ所確認した。SK-5はこの焼土の下から検出された。

遺物は甕(1・巻頭図版3-1)、高坏脚部(2・巻頭図版3-2)、甕(3・巻頭図版3-3・取上番号R-2)が出土した。破片が多いので特定は難しいが時期は弥生時代後期～終末期と考える。

#### 竪穴式住居 SC-2 (第4図・巻頭図版1-1)

調査区南側で検出した。方形の竪穴式住居である。SC-1に比べてやや南東～北西方向に軸をとり、南北2.5m以上×東西3.7m以上を測る。東側は調査範囲外に伸びている。また南側はSC-1に切らされている。全体の形状は不明。SC-1よりも削平を著しく受けており、遺構覆土そのものが数cmしか残存していない部分もあった。を受けていて遺構の残り具合は不良である。北辺に幅約1.1m、地山ローム層の削り出しのベッド状遺構が付く。

遺物は鉢(4・巻頭図版3-4)が出土した。時期は弥生時代後期～終末期か。

#### 竪穴式住居 SC-3 (第6図・PL2-7～8)

調査区東側で検出した。方形の竪穴式住居の西南隅の一部である。ほぼ東西方向に軸をとり、南北2.1m以上×東西2.5m以上を測る。竪穴式住居の大部分は調査範囲外に伸びている。南側は幅1.3mの地山ローム層の削り出しのベッド状遺構と考えられる。壁溝は検出されなかった。

遺物はベッド状遺構の調査区の壁際から高坏(4・取上番号R-2)、甕(4・巻頭図版3-5)が出土した。時期は弥生時代終末期か。

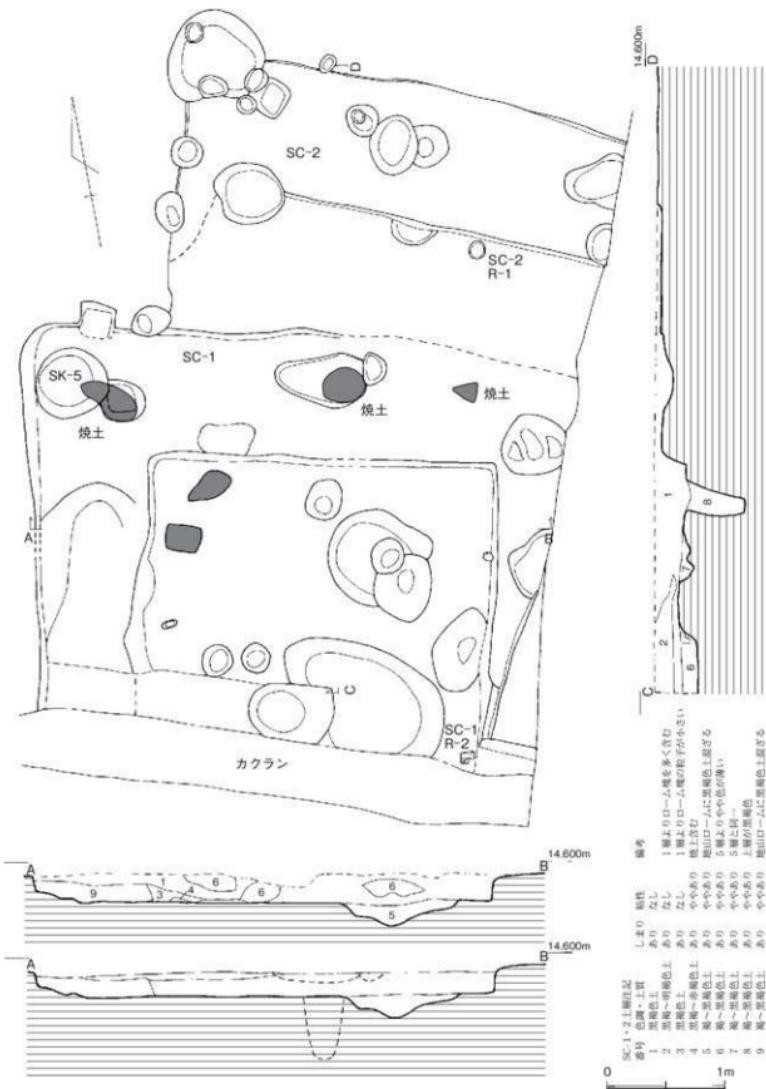
#### 溝状遺構 SD-4 (第6図・PL3-1)

調査区東側で検出した。幅80cm深さ20cmの弧状に走る溝である。溝の北西側は調査範囲外に伸び、溝の北東側はSC-3の覆土上に伸びている。調査区北側に隣接する第12次調査区でもこの遺構と関連する遺構は検出しておらず、遺構の性格は不明である。

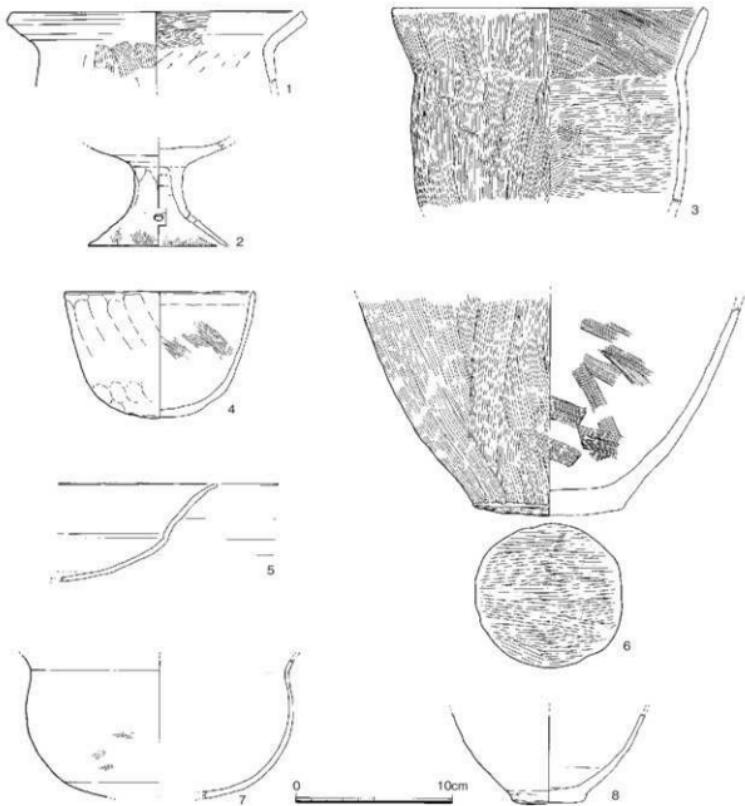
炭化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明である。

#### 土坑SK-5 (第4図・PL2-5～6)

調査区南側で検出した。直径60cm、深さ76cmを測る、平面円形の土坑である。SK-5はSC-1の北西隅ベッド状遺構内に位置している。SK-5はSC-1の焼土の下から検出された。SC-1と同時期もしくはより古い遺構であると考えられる。



第4図 SC-1・SC-2・SK-5 (1 / 40)

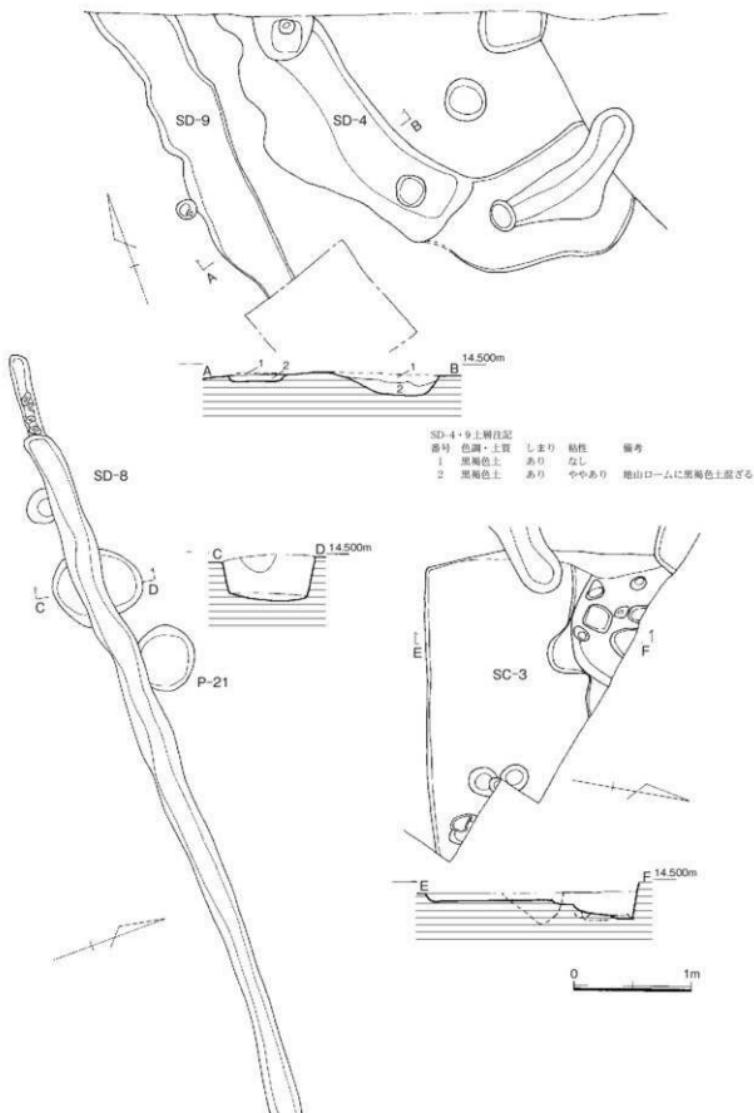


第5図 SC-1・SC-2・SC-3・SK-5・SC-7出土遺物 (1 / 3)

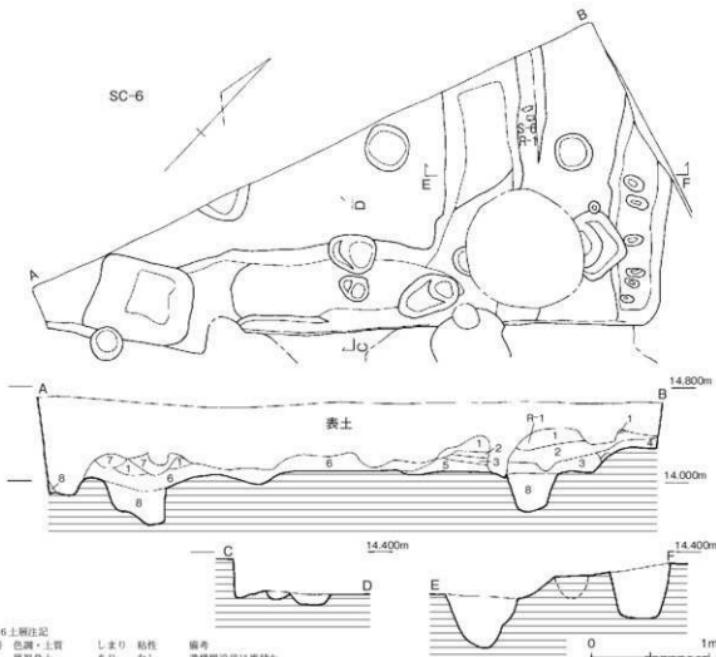
遺物は壺(7)が出土した。時期は弥生時代後期～終末期である。

#### 竪穴式住居 SC-6 (第7図・巻頭図版1-2・PL.3-2～5)

調査区北側で検出した。方形の竪穴式住居の東南隅である。北東～南北方向に軸をとり、南北2.6m以上×東西5.2m以上を測る。北西側は調査範囲外に伸びている。北東辺に幅約1.1m、地山ローム層の削り出しのベッド状遺構が付く。ベッド状遺構および中央部分に壁溝を有する。ベッド状遺構の壁溝は幅50cm、深さ35cmを測り、中央部分の壁溝は幅70cm、深さ30cmを測る。周辺の竪穴式住居の調査事例と比較しても幅広で深い壁溝である。壁溝の覆土は地山のローム土に黒褐色土の混ざった土であり(第7図8層)、他の部分の覆土とは明確に異なる。部分的な張り床の可能性がある。



第6図 SC-3・SD-4・SD-8・SD-9 (1 / 40)



番号	色調・土質	しまり	粘性	備考
1	黒褐色	あり	なし	遺構設営後に堆積か。 ローム層多く含む。
2	黒褐色～明褐色	あり	なし	3種より口縁・上端を多く含む
3	黒褐色土	あり	なし	3種より口縁が含む
4	黒褐色	あり	なし	2種よりローマ層を多く含む
5	黒褐色～明褐色	あり	なし	1種よりローマ層を多く含む
6	黒褐色土	あり	なし	2種よりローマ層が大きい。複乱層か。
7	黒褐色～明褐色	あり	ややあり	地山ロームに黒褐色土混ざる
8	黒褐色土	あり	ややあり	

第7図 SC-6 (1 / 40)

遺物は壺? 口縁部(9)、壺頭部(10)、器台? 脚部(11・取上番号壁面R-1)、壺底部(12・取上番号R-1)が出土している。時期は弥生時代後期~終末期か。

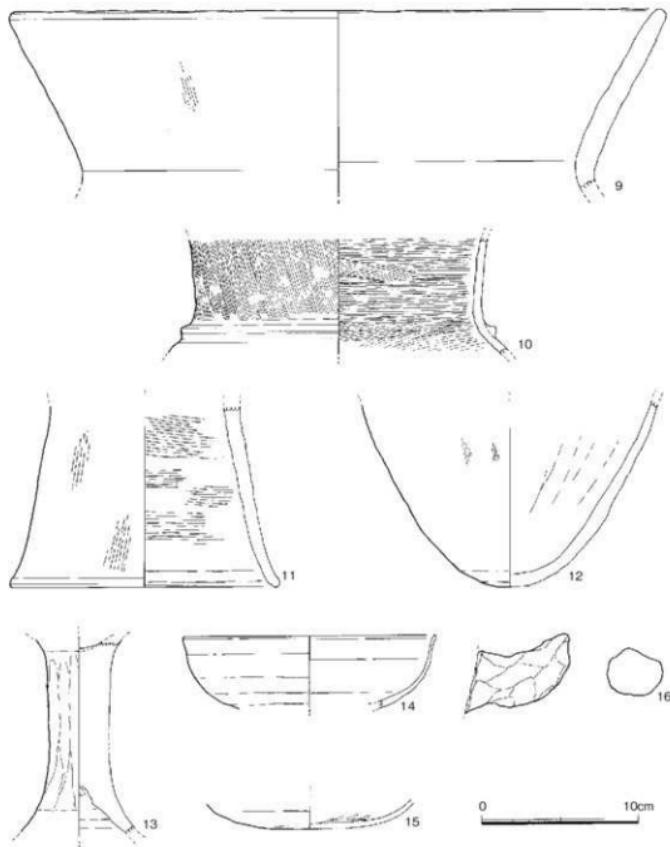
#### 竪穴式住居SC-7(第7図・巻頭図版1-3・PL3-6)

調査区中央付近で検出した。方形の竪穴式住居である。南東~北西方向に軸をとり、南北3.4m以上×東西3.8m以上を測る。中央部分と南・東辺は擾乱によって削平を受けていた。遺構の残存状況は不良で、覆土も10~20cm程度しか残存していなかった。ベッド状造構が付くかは不明。中央部分で被熱した地山を検出した。

遺物は壺底部(8・取上番号R-1)が出土した。時期は弥生時代後期~終末期か。

#### 溝状造構SD-8(第6図・PL3-8)

調査区中央付近~東側で検出した。幅30cm深さ20cm残存長7mの、ほぼ東西方向直線状に走る溝である。溝の東側は調査範囲外に伸び、溝の西側はSC-7付近で止まっている。SC-7との関係は不明。



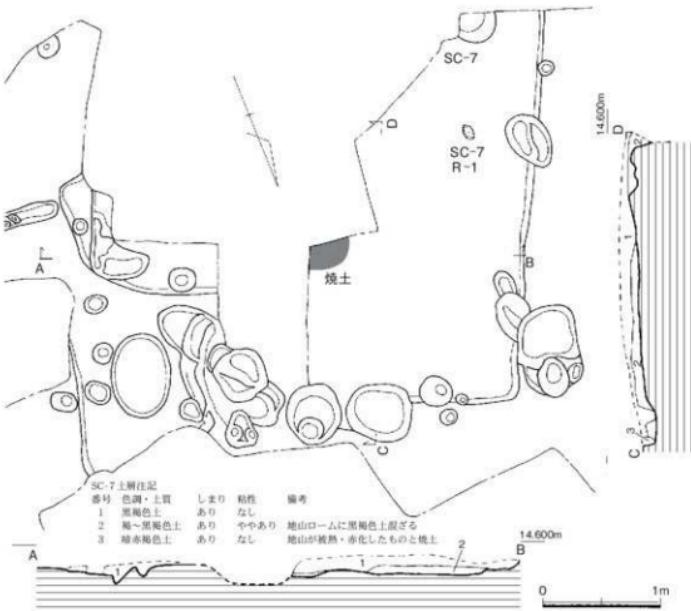
第8図 SC-6・ピット出土遺物 (1 / 3)

図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明である。

#### 溝状遺構SD-9 (第6図・PL 3-1)

調査区東側で検出した。幅50cm深さ10cmの直線状に走る溝である。溝の北西側は調査範囲外に伸び、溝の北東側はSC-3の覆土上に伸び、南東側は擾乱によって削平されている。SD-4と部分的に平行している。両者の関係は不明。調査区北側に隣接する第12次調査区でもこの遺構と関連する遺構は検出しておらず、遺構の性格は不明である。

図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明である。



第9図 SC-7 (1 / 40)

#### ピットP-21(第6図・PL3-8)

調査区中央付近で検出した。直径60cm深さ36cm、平面円形の土坑である。SD-9に切られる。

遺物は高環脚部(13・巻頭図版3-8)が出土した。時期は弥生時代後期～終末期か。

#### ピット出土遺物(第8図)

ピット出土の國化可能な遺物は土器師楕(14)、黒色土器壺(15)、顛把手(16)が出土した。時期は奈良時代～平安時代である。復元はできなかったが本調査地点で検出したピットの一部が奈良時代～平安時代の掘立柱建物になると考えられる。

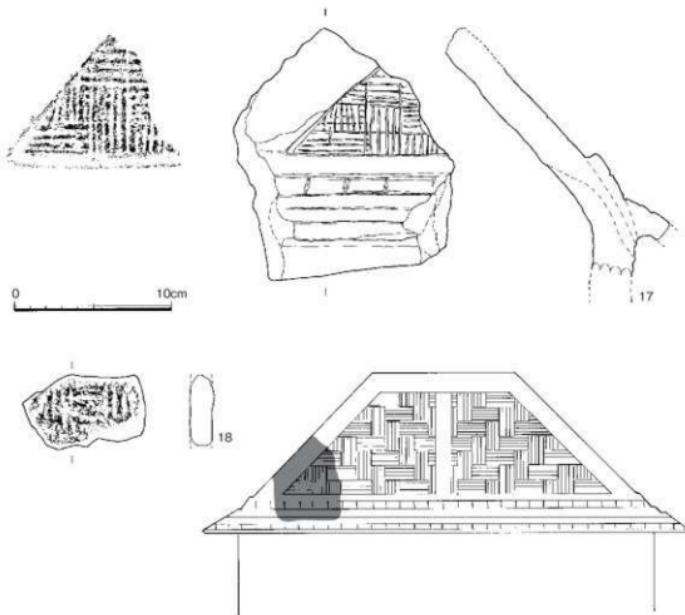
#### 遺構外出土 家形埴輪片(第10図・巻頭図版2)

##### 出土状況

家形埴輪片(17)は、調査開始前のバックホウによる調査区北側(SC-7付近)を表土剥ぎ中に発見したものである。現地表面下約20cm付近から出土した。17の発見に伴い周辺と廃土を精査したところ家形埴輪片(18)を発見したが、その他に埴輪片は出土しなかった。また、調査開始以後の遺構覆土や搅乱内からも埴輪片の出土は見られなかった。

##### 遺物詳細

17は水平に置いた状態で縦19cm横14cm高6cmを測る。貼り付けた粘土板を含まない厚さは銳



第10図 遺構外出土 家形埴輪片 (1 / 3)

角部で2cm、周囲で2.5cmである。色調は表面が黄褐色～淡橙色を、裏面上部が橙色、裏面下部が黒褐色を呈する(巻頭図版2-1・2-2)。胎土は直径1～3mmの砂粒を多量に含む粗い土である。砂粒の色調は半透明・白色・暗赤褐色・黒色などである。左・右・下側は欠損している。

55°の鋭角の中を沈線によって一辺2.3cmの正方形の格子状に区切り、正方形の中を4本の沈線によって充填する。4本の沈線の方向は垂直方向と水平方向であるが、水平方向と垂直方向の格子が千鳥状ではなく、左が高く右が低い階段状に並んでいる。格子を区切る沈線と格子を充填する4本の沈線とでは、前者が幅1mm前後・断面V字、後者が幅2mm前後・断面U字と異なっており、違う原体を用いたようである。また格子の下から二列目左から1・2つ目の格子は文様構成上垂直方向になるはずであるが、当初は水平方向に施し、その後垂直方向に修正した痕跡が残っている。

銳角の周囲は5mmほど高くなっているが、左斜辺側は剥離している。銳角底辺側は底辺から3.5cm下に底辺と平行に、長さ3cm厚1.8cmの粘土板を130°の角度で貼り付けている。粘土板の格子側には頂点から1.6cmのところに幅1mmの沈線を底辺と平行に引いている。また粘土板貼り付け後に、底辺から1.7cmと粘土板との間に縦方向(やや右上左下方向に傾く)に沈線を2.7cmの間隔で引き、その後底辺から1.7cmのところと粘土板との接する部分に底辺に平行に沈線を引く。

18は水平に置いた状態で縦4cm横7.5cm厚1.5cmを測る。色調は表裏面とも淡橙色を呈する(巻

頃図版2-4)。断面の粘土の流れから上下左右を判断したが、誤っている可能性もある。胎土は17と同様である。

表面には3つの格子の痕跡が確認できる。左右の二つは縦方向、中央の一つは横方向の沈線を充填している。沈線の形状は17に同じ。

#### 種別と部位の推定

縦方向と横方向の格子が階段状に配置された表現されたものは井戸B1号墳の調査では報告されていないが、宮崎県西都市西都原169・171号墳の家形埴輪の屋根の網代表現に類例がある。網代表現は他の形象埴輪にはみられず、17・18とも家形埴輪の一部であろう。ただしこの網代表現は西都原169・171号墳や沖出古墳の家形埴輪では屋根の最上部にのみ表現されている。従ってこの17も最上部ということになるが、網代が鋭角になっていることが問題である。入母屋造りの上屋根の最下であれば網代は鈍角になるはずであり、上述した類例でもすべて鈍角になっている。切妻造りでも同様である。すると入母屋の下屋根か寄棟造りの下端ということになる。だが、入母屋造りで下屋根にまで網代を表現した事例は管見では確認できなかった。また寄棟造りの場合でも屋根の上半まで網代を表現した例(奈良県御所市室宮山古墳寄棟造家形埴輪)はあるが、屋根下端まで網代を表現した事例は管見では確認できなかった。井戸B遺跡群第2次調査の井戸B1号墳出土埴輪の報告では、家形埴輪は飾り入母屋造りとして復元されているが、17のような網代表現をもつ家形埴輪片は報告されておらず、家形埴輪としては別個体の可能性がある。

寄棟造りか入母屋造りになるかの決定は、本調査地周辺での調査例、および家形埴輪の出土例の増加を待つかないが、現状では寄棟造りと仮定し復元図を作成した(第10図右下)。第2次調査で出土した家型埴輪の底(Fig.30-18)の形状・文様を加味し、底がもう少しのびると仮定して復元している。

## IV. 小結

### 1. 壱穴式住居について

本調査地点からは弥生時代後期～終末期の壹穴式住居が5軒検出された。北側隣接地の第12次調査でも8軒検出されており、ほぼ同内容の遺構が南側にも広がっていることが本調査で確認できた。ただし第12次調査が125m<sup>2</sup>で8軒であるのに対し、本調査は240m<sup>2</sup>で5軒と遺構密度が低下している。本調査地点が削平を受けていることも多少影響しているだろうが、第12次調査より遺構密度が低いことは間違いないと考える。弥生時代から古墳時代前期の壹穴式住居の分布の中心は第12次調査を中心とした井戸B1号墳西側付近であると想定される。

### 2. 家形埴輪と井戸B1号墳について

本調査で出土した家形埴輪片は網代表現にこそ類例がないものの、底の形状が類似することや、網代表現の類例が西都原169・171号墳など井戸B1号墳と同じ川西編年Ⅲ期の埴輪に求められることなどから、17・18は本来、井戸B1号墳に樹立していた埴輪だったといえる。

17・18から出土した時点では、これらがなぜ本調査地点から出土したのかが不明であった。井戸B

1号墳は、第2次調査の時点では円墳もしくは前方後円墳と推定され、第5次調査報告の時点で周溝外側径約24mの円墳と想定されていた。本調査地点は井尻B1号墳から約40m離れており、前方後円墳であったとしても前方部が本調査区までのびるとは考えにくかったが、造り出しのような井尻B1号墳関連施設があった可能性までは排除できなかった。また、井尻B1号墳と同時期の埴輪を持つ古墳が本調査地区内に存在する可能性も考えられた。

だが調査の結果、埴輪を出土した遺構はもとより、搅乱や表土中からも埴輪の出土がなく、また、特に家形埴輪に比べて、圧倒的に量の多い円筒埴輪片が出土しなかったことは、本調査地点に井尻B1号墳関連施設や埴輪をもつ古墳が存在しなかった事を裏付けるものと考える。おそらく井尻B1号墳周辺を掘削した土が本調査地点の表土にたまたま紛れ込んだものであろう。

家形埴輪片の復元案は現状でもっとも妥当と判断したものであるが、未解決の問題点も多い。識者のご指摘をいただけると幸いである。

#### 参考文献

井尻B遺跡群（第2・5・6・12次）

山口譲治・吉留秀敏ほか1986『井尻B遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集

菅波正人1996『井尻B遺跡4—井尻B遺跡第5次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第441集

宮井善朗1996『井尻B遺跡5—第6次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第529集

田上勇一郎2000『井尻B遺跡8—井尻B遺跡群第12次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第645集

#### 埴輪について

一瀬和夫・車崎正彦編2004『考古資料大観4弥生・古墳時代 墓輪』小学館

竹中克繁2006『古墳時代前期における九州の埴輪』『前期古墳の再検討 第9回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨資料集』九州前方後円墳研究会



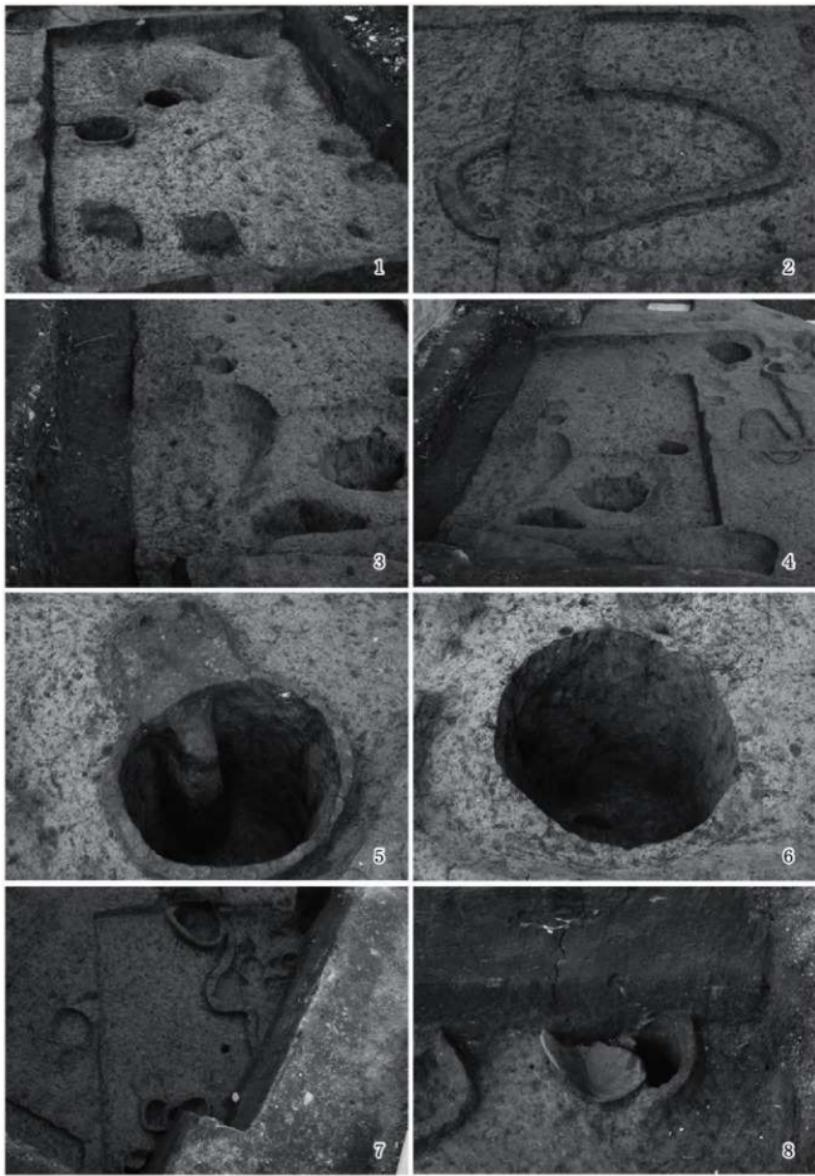
# 図版



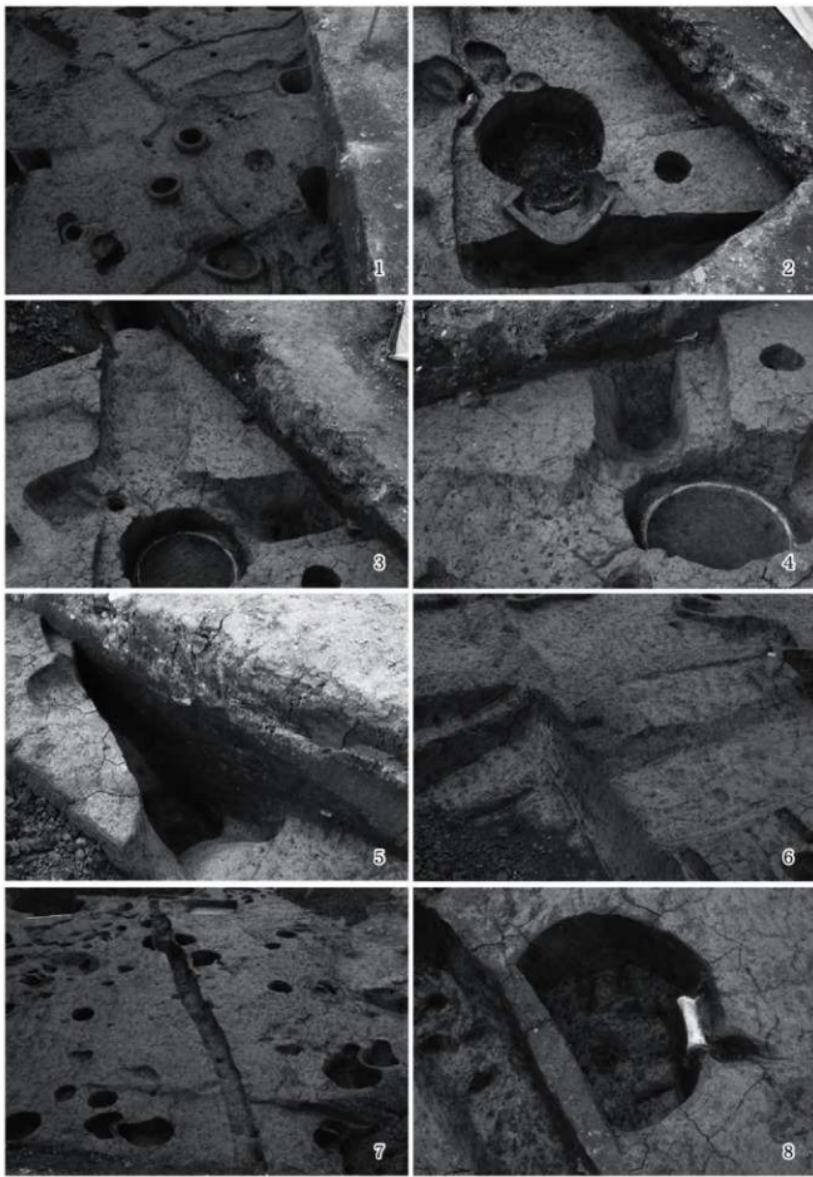
1. 調査区東半全景（西から）



2. 調査区西半全景（西から）



1. SC-1中央部分（西から） 2. SC-1 焼土部分（南から） 3. SC-1中央土坑（東から）  
4. SC-1完掘時（東から） 5. SK-5と焼土（西から） 6. SK-5完掘時（西から）  
7. SC-3（西から） 8. SC-3 R-1出土状況（南から）



1. SD- 4・SD-9 (西から) 2. SC-6 (北東から) 3. SC-6 張り床完掘時 (北東から)  
4. SC- 6 張り床完掘時 (南東から) 5. SC-6 P-2 (北東から) 6. SC-7 燥土 (南東から)  
7. SD-8 (東から) 8. P-21 (東から)

## 報告書抄録

ふりがな	いじり						
書名	井尻B遺跡18 一井尻B遺跡群第28次調査報告－						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	974						
編著者名	赤坂亭						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	西暦2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
井尻B遺跡群 第28次	福岡県 福岡市 南区 井尻4丁目 170番12他	40130 0090	33° 33' 01"	130° 26' 34"	2006.12.11 ~ 2007.01.31	240.6	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物				特記事項
井尻B遺跡群 第28次	集落	弥生時代	集落－弥生時代後期～終末期/竪穴式住居5軒 3ビット多數－弥生土器				包含層から家形埴輪 片出土
要約	本調査地点からは弥生時代後期～終末期の竪穴式住居5軒、溝3条が検出された。北側隣接地の第12次調査でも竪穴式住居が8軒検出されており、ほぼ同内容の遺構が南側にも広がっていることが本調査で確認できた。ただし第12次調査に比べ遺構密度が低下している。弥生時代から古墳時代前期の竪穴式住居の分布の中心は第12次調査を中心とした井尻B1号墳西側付近であると想定される。また表土中から井尻B1号墳の家形埴輪片が出土した。古墳や遺構に伴うものではない。						

## 井尻B 遺跡18

2008年（平成20年）3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
TEL: (092) 711-4667

印刷 秀巧社印刷株式会社  
福岡市南区向野2-13-29  
TEL: (092) 541-5661